

短期大学教育の質の保証と教学改革： 学修成果につながるアクティブ・ラーニング

2014年10月27日
私立短大教務担当者研修会
山田礼子 同志社大学

2

発表内容

1. 教育の質保証のために何をすべきか：
2. 短期大学生調査とは
3. 2012年度調査結果の概要
4. 短期大学生調査の利用方法
5. アクティブ・ラーニングとラーニング・コモンズ
6. お知らせ

1. 教育の質保証のために何をすべきか

教育の質保証： 第一ステージから第二・第三ステージへ

- ▶ 第一ステージ: シラバス、GPA制度、CAP制、学生調査等を導入してきた今までの各大学の取組
- ▶ 第二ステージ: IR機能の充実、IRを活用した評価、その評価結果を単位の実質化、学生の学習時間の確保に結びつける教育環境の整備の段階



- ▶ 第三ステージ: データの結果と評価を学生教育への還元

質保証の一環としてのデータの活用

- 何を教えるかから何ができるかに発想を転換
- 学生の現状を客観的データから把握
- 学生の高校時代の情報と現状とを関連づけて分析
- アウトカムとカリキュラム、あるいは授業とを関連づけて分析
- 授業評価と学生データとを関連づけて分析
- 教員のFDに学生データを活用



カリキュラムの見直し、教授法の見直し

アウトカム・アセスメントに関する 直接評価と間接評価の使用モデル

マクロ 大学全体 学部 プログラム	ミクロ 教室内・授業
<ul style="list-style-type: none"> • 直接評価 • 標準テスト(CLA、TOEFL、TOEIC等) • ルーブリック • 間接評価 • 学修行動調査 	<ul style="list-style-type: none"> • 直接評価 • ルーブリック • ポートフォリオ • レポート • テスト(個別テスト、標準テスト) • 間接評価 • 授業評価

先行しているアメリカの動向

- 早期からの学生研究→カレッジ・インパクト理論と研究の蓄積
- 研究から生まれた学生調査
CIRP (TFS とCSS) (UCLA)
NSSE (インディアナ大学) 等
- 直接評価であるテスト研究と開発
CAAP, MAPP, CLA, ASSET, College BASE等

学生調査開発の目的

- JCSSとJFSの開発が先行
- JCSS (日本版大学生調査)
- JFS (日本版新入生調査)
- JJCSS (短期大学生調査)の目的
 - 長期的に複数の機関で継続的に実施できる情緒的側面を重視した学生調査の開発
 - 複数の機関で教育効果を測り、教育改善につながる汎用性のある学生調査の開発
 - 国際的にも比較できるような学生調査の開発

2. 短期大学生調査とは

概要は塚 完・山崎 慎一作成

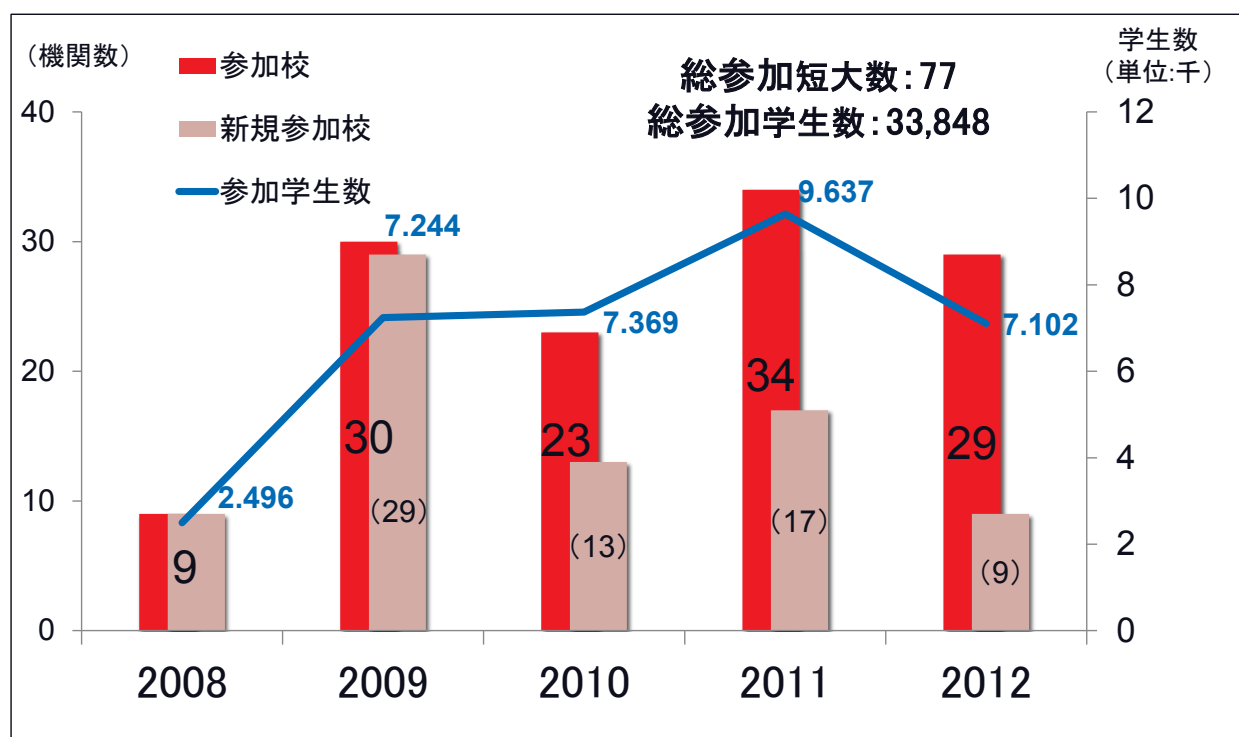
短期大生調査(JJCSS)とは

- 短期大学基準協会の調査研究委員会とJCIRP研究チームが協同で実施
- 短期大学は四年制大学に比べ、2～3年間の短い課程の中で、学生の成長を検証する必要
⇒逆に短いからこそ、教育目標の設定やその効果の測定を行えば、教育方法やカリキュラム改善につなげやすい
＝間接評価としての学生調査の可能性
- 短大自ら自己改善・自己評価につなげられる資料(データ)として短大生調査を実施

質保証のツールとしての連携の過程

- JJCSS(短期大学生調査)は、短期大学基準協会と連携して実施
- 短期大学基準協会が参加大学を募集
- 課金システムを採用
- データの返却、報告書の作成、参加短期大学からのフィードバック
 - 質問項目内容、実施方法、要望等のアンケート
- フィードバックを次年度の改善に反映

JJCSSの参加校とその学生数の推移 (過去5年分)



調査の概要

【主な調査内容】(全37問240項目)

- ・ 学生の基本属性情報(性別や学年、専門分野、高校の種別等)
 - ・ アドミッションに関する情報(進学理由、志望度、入試形態等)
 - ・ 学生生活の実態(入学後の経験全般、1週間の活動時間等)
 - ・ 入学後の能力の変化
 - ・ 短大に対する満足度(施設・支援サービス／教育)
 - ・ 学生の価値観
 - ・ キャリアについて(職業選択、進学アスピレーション等)
- etc.

⇒ 網羅的に学生の状況を把握できる調査設計

調査概要(JJCSS2012)

【実施時期】

2012年11月～12月中旬

【回答方法】

授業中に実施し、設問冊子を見ながら別紙マークシートに回答(標準回答時間:20～30分)

【参加校数、参加人数】(短基協会員校数比)

29校、7102名(会員校323校中)⇒全体の9%参加

※ 短大によって全数調査、サンプル調査を選択可。
参加校には、自大学の学生データと全体集計結果をフィードバック。

3. 2012年度調査結果の概要

図表は塚 完・山崎 慎一作成

調査結果①学生情報

[性別]

6,676名が女子学生(94.3%;全国割合88.7%)

[学年別]

1年生:3,235名(45.7%;全国割合47.1%)

2年生:3,637名(51.4%;全国割合49.3%)

3年生以上:196名(2.8%;全国割合3.6%)

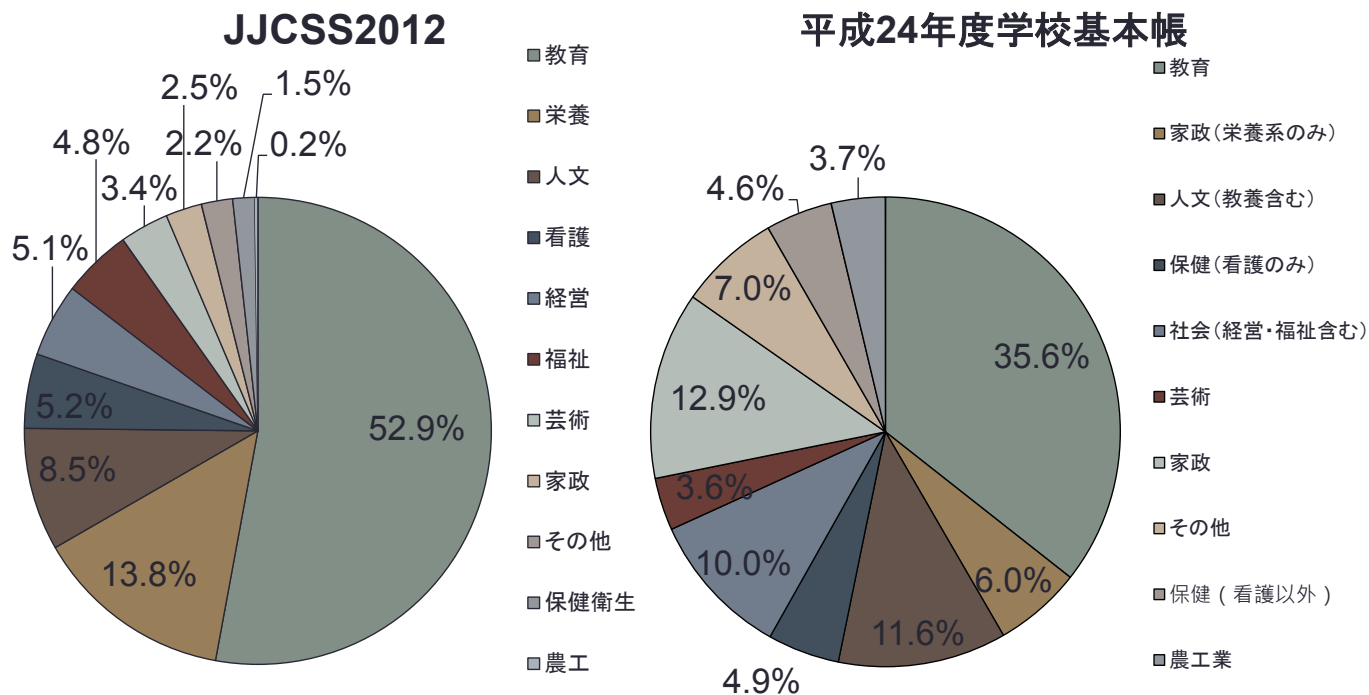
その他(科目等履修生など):10名(0.1%)

[専門分野]

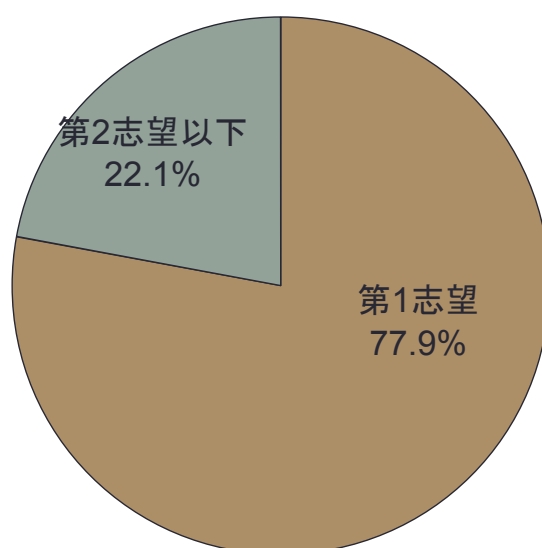
⇒ 全国平均とは大きくかけ離れた専門分布

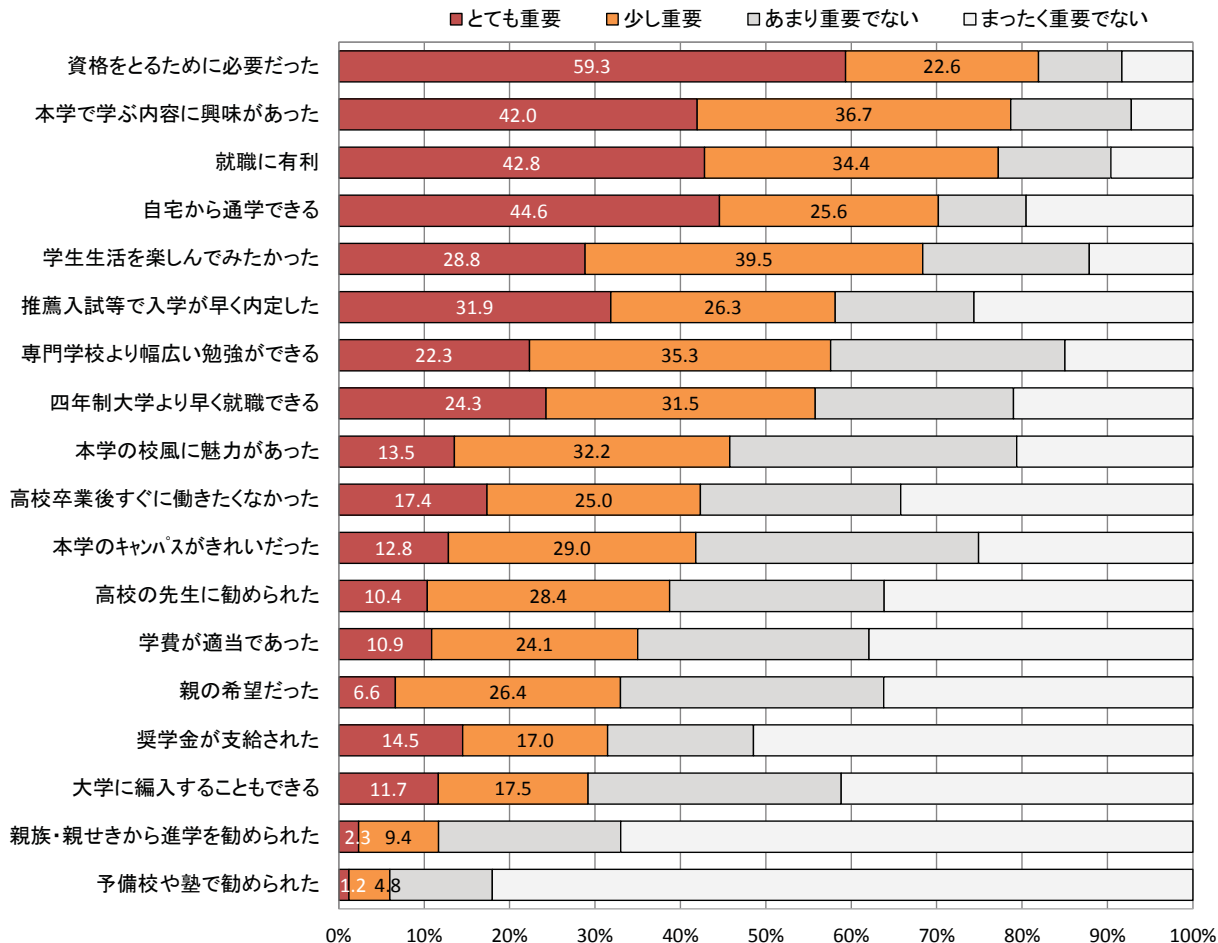
※ 全国割合は「平成24年度学校基本調査」による

専門分野の割合(学科別学生数)

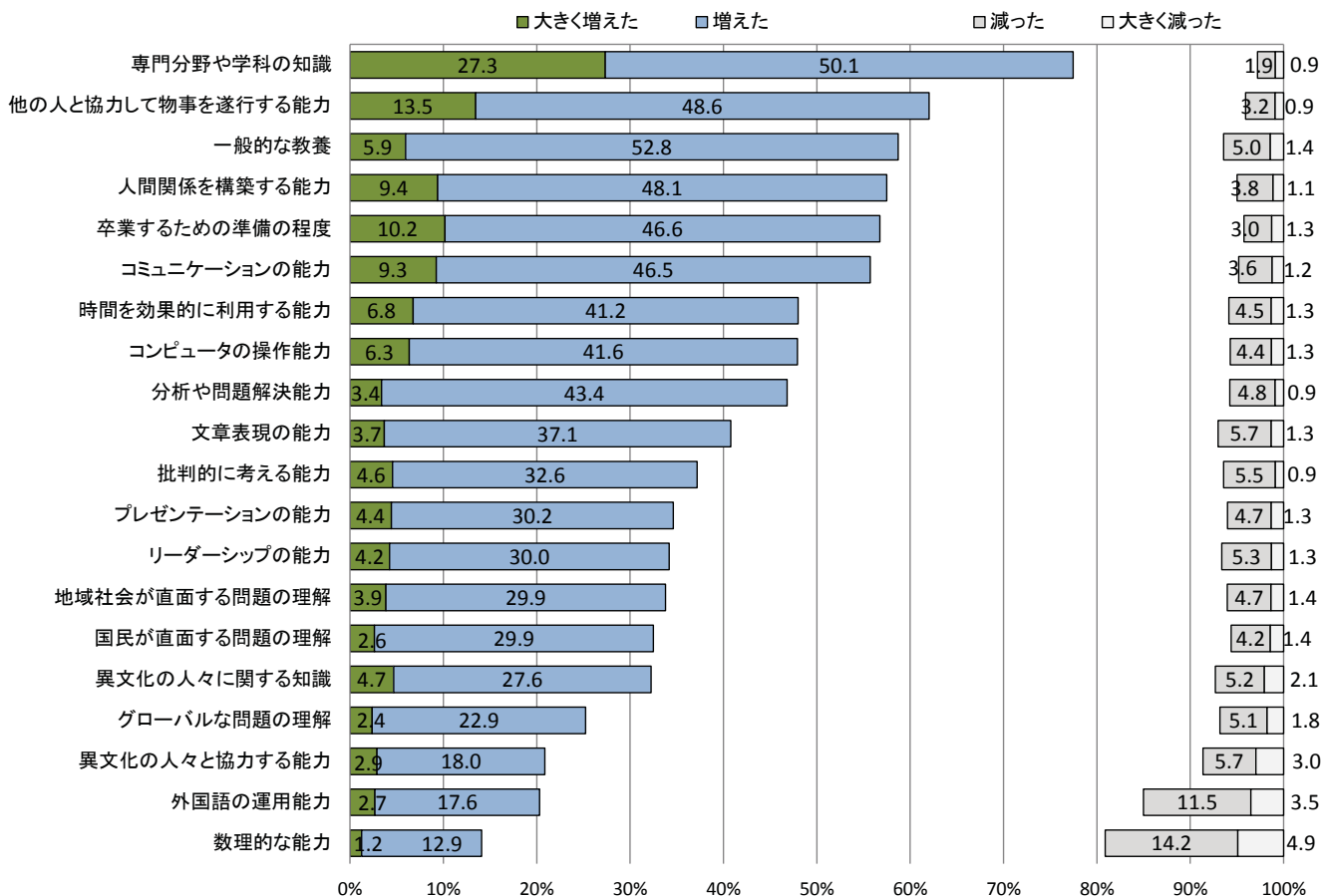


調査結果②志望順位と進学理由



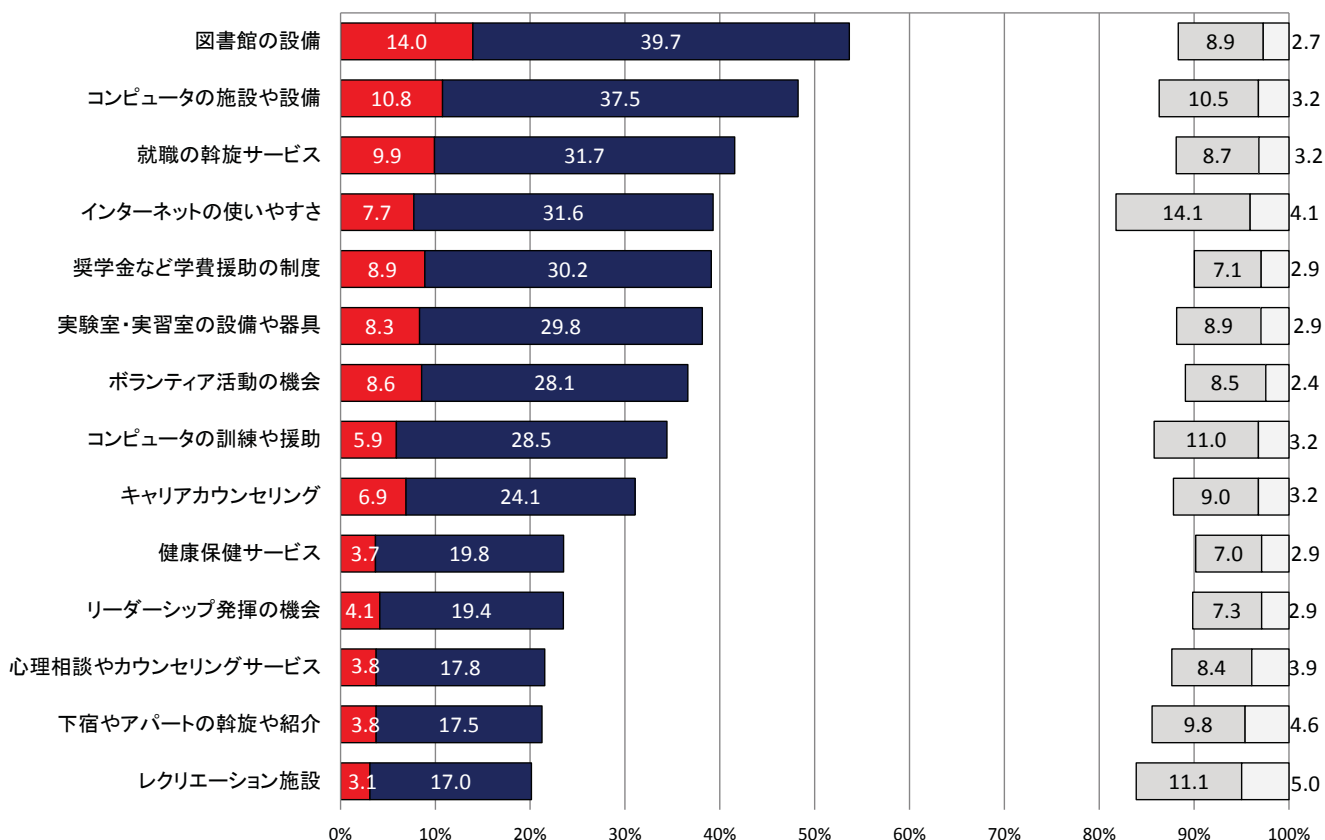


調査結果③学習(修)成果



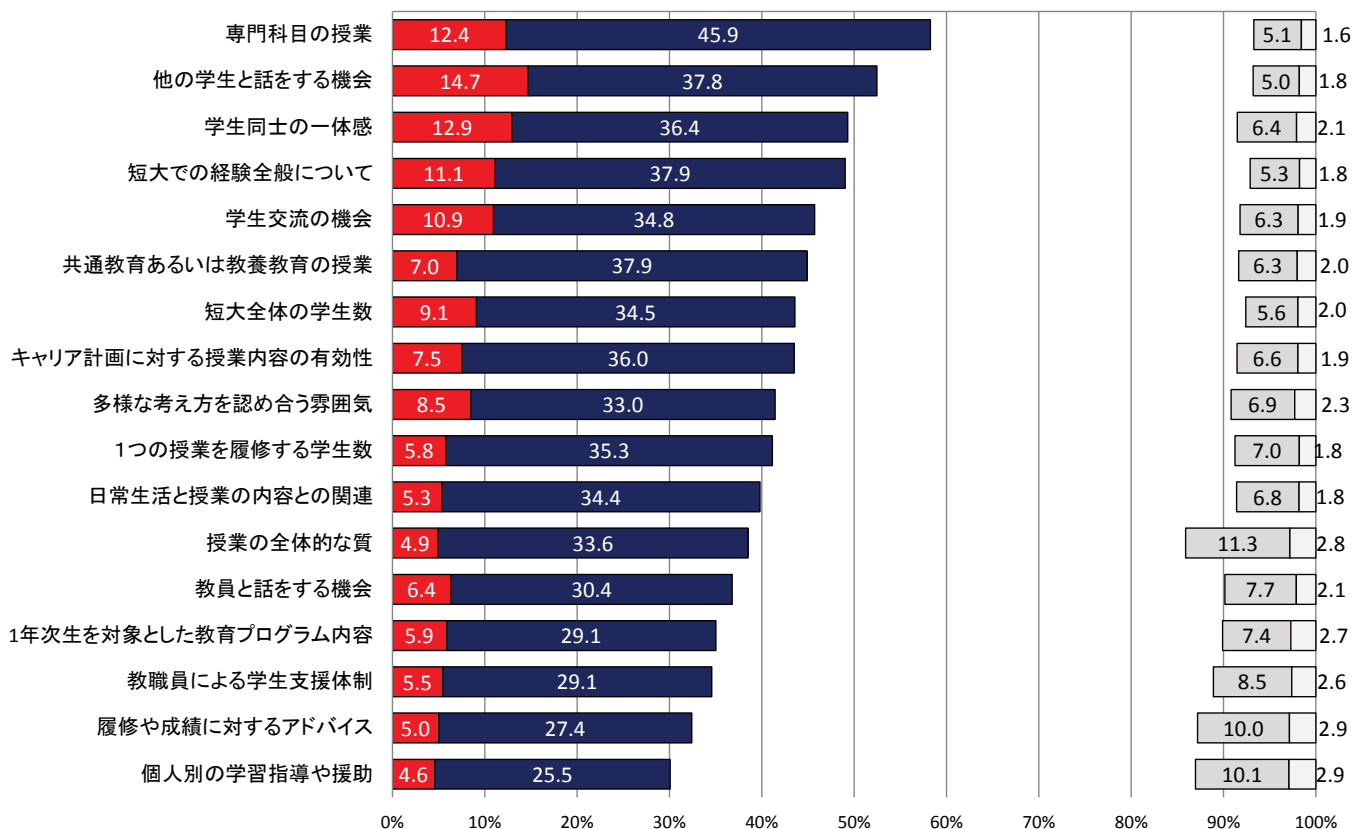
調査結果④満足度(施設・学生支援サービス)

■とても満足 ■満足 □不満 □とても不満



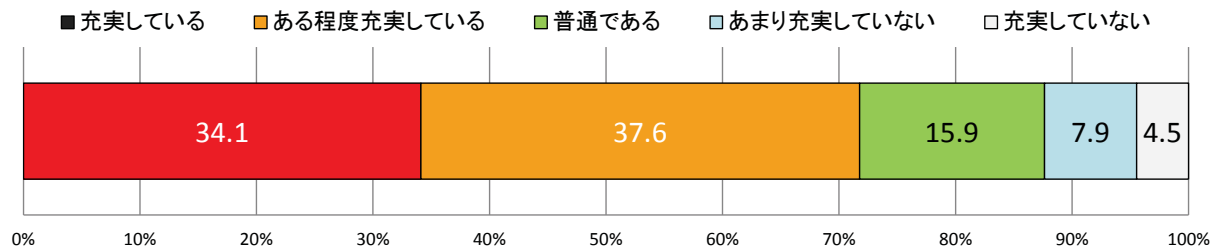
調査結果⑤満足度(教育)

■とても満足 ■満足 □不満 □とても不満

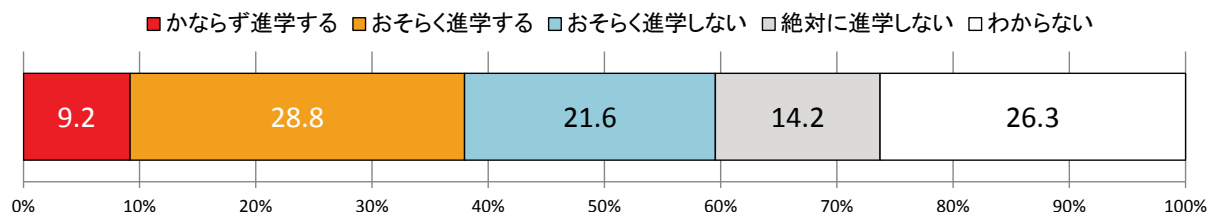


調査結果⑥短大への評価

短大における学生生活の充実度



選び直せたら本学に再び入学するか(再入学の可能性)



あなたの学生生活は充実していますか

	充実している	ある程度 充実している	普通である	あまり充実 していない	充実していない	合計
かならず進学する (N=620)	76.3%	18.2%	3.5%	1.3%	0.6%	100.0%
もし大学や短 大を選び直せ たら、あなた はもう一度、 本学に進学し ますか おそらく進学する (N=1957)	45.5%	43.0%	8.2%	2.7%	0.5%	100.0%
おそらく進学しない (N=1464)	20.4%	41.0%	23.8%	11.6%	3.2%	100.0%
絶対に進学しない (N=958)	14.0%	27.0%	19.4%	20.0%	19.5%	100.0%
わからない (N=1785)	29.4%	41.3%	19.9%	6.4%	3.0%	100.0%
合計 (N=6784)	34.2%	37.6%	15.8%	7.9%	4.5%	100.0%

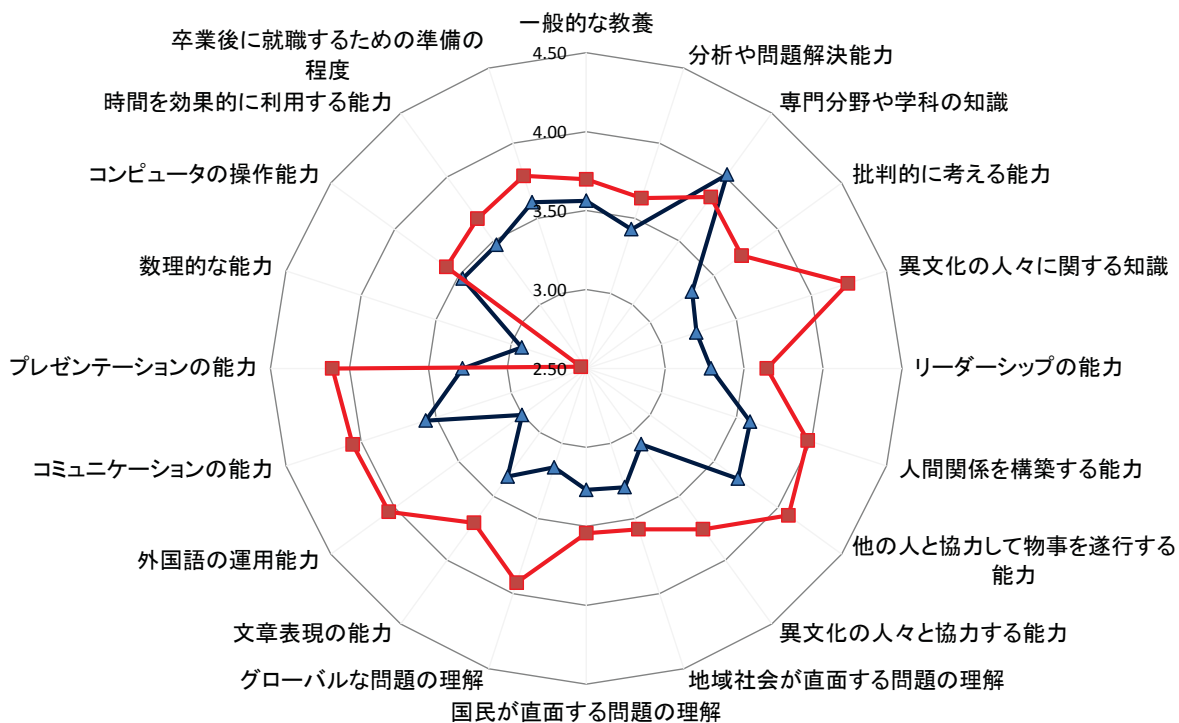
3. 短期大学生調査の利用方法

事例紹介: 学習(修)成果のベンチマーク

- 個別短大と全体比較(Q短大ー全体)
- 個別短大内での比較(Q短大のみの学年比較)
- 個別短大内での経年比較(複数年参加U短大の年度別比較)⇒同一集団の経年変化

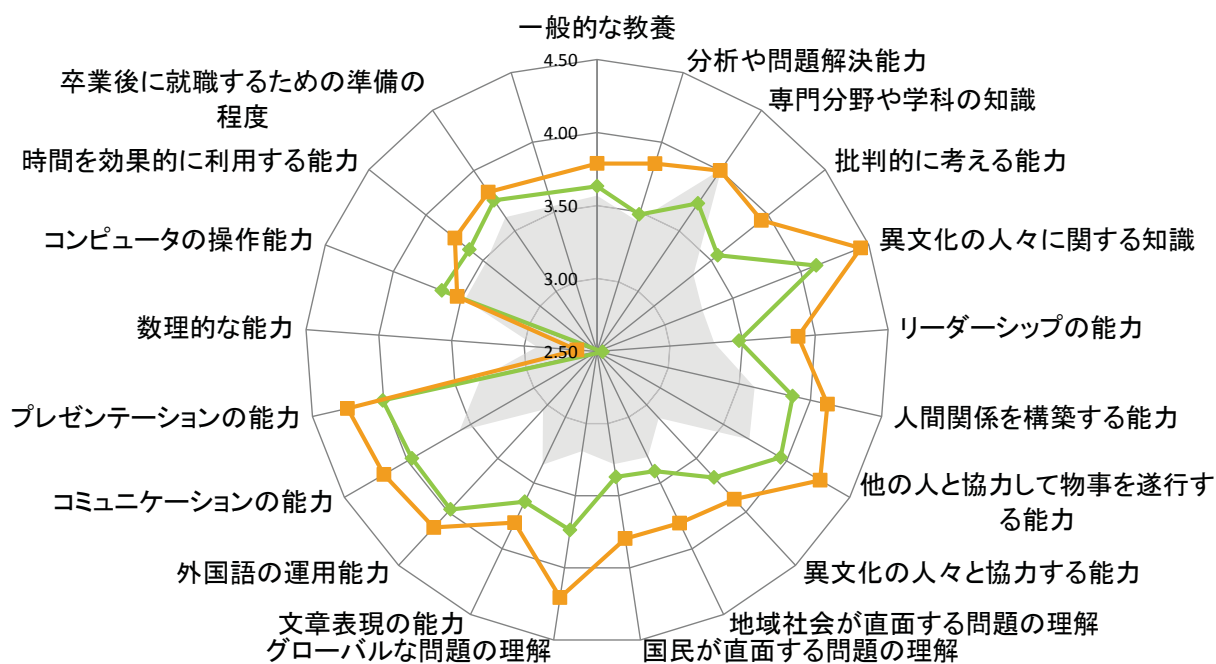
JCSS2012学習(修)成果(Q短大と全体結果の比較)

▲全体 (N=6812) ■Q短大 (N=290)

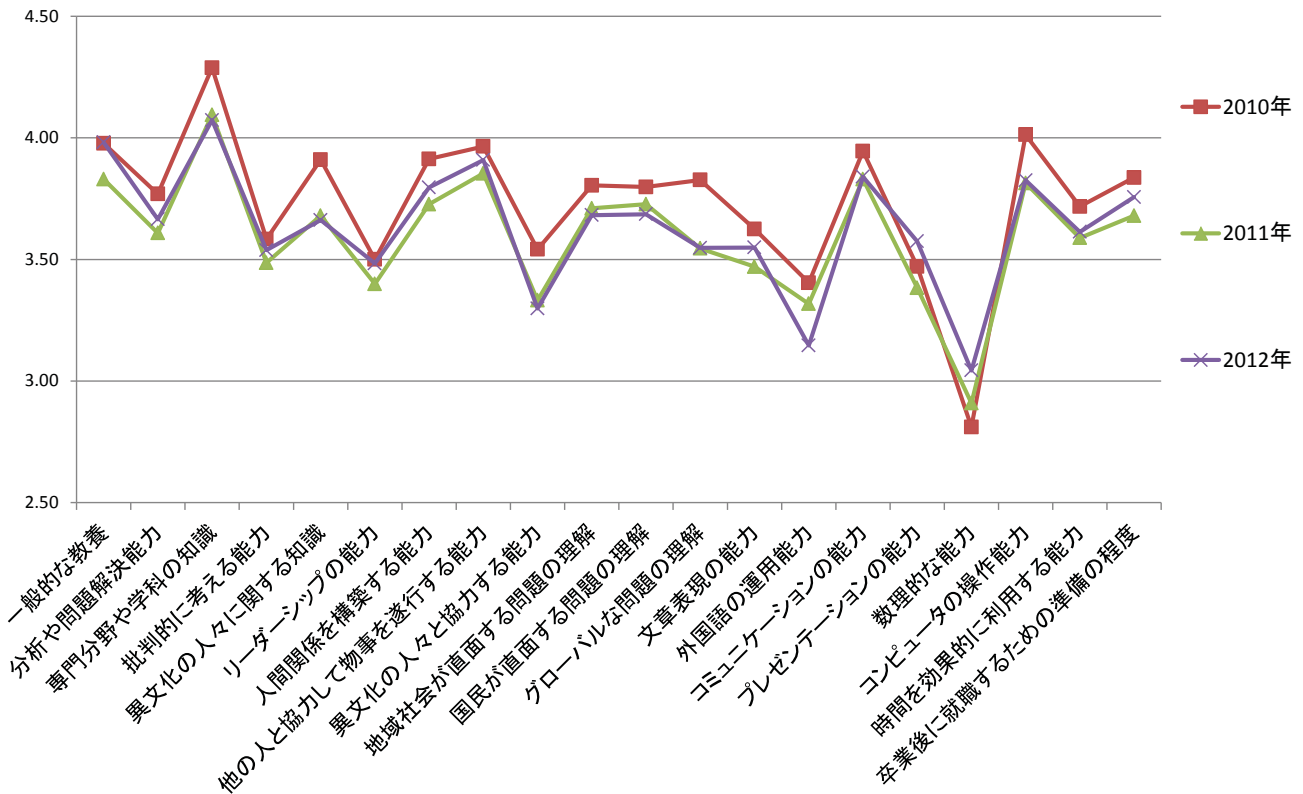


Q短大における学習(修)成果の学年比較

■全体 (N=7102) ◆1年生 (N=168) ■2年生 (N=128)

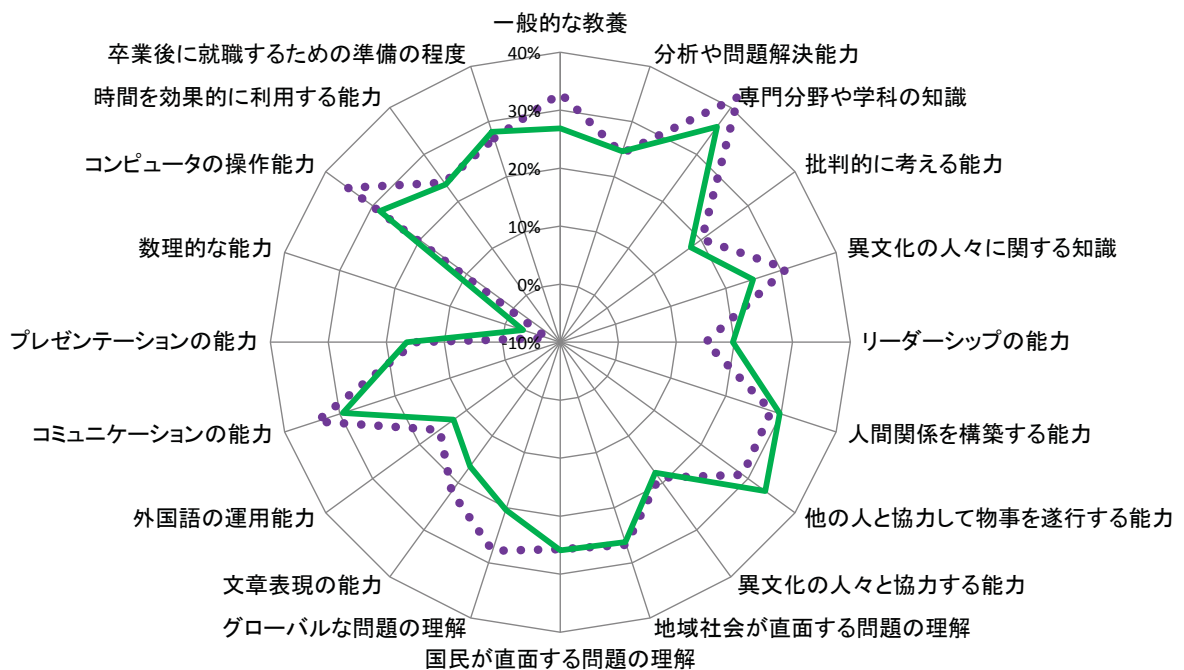


U短大における学習(修)成果の経年比較(3年分)



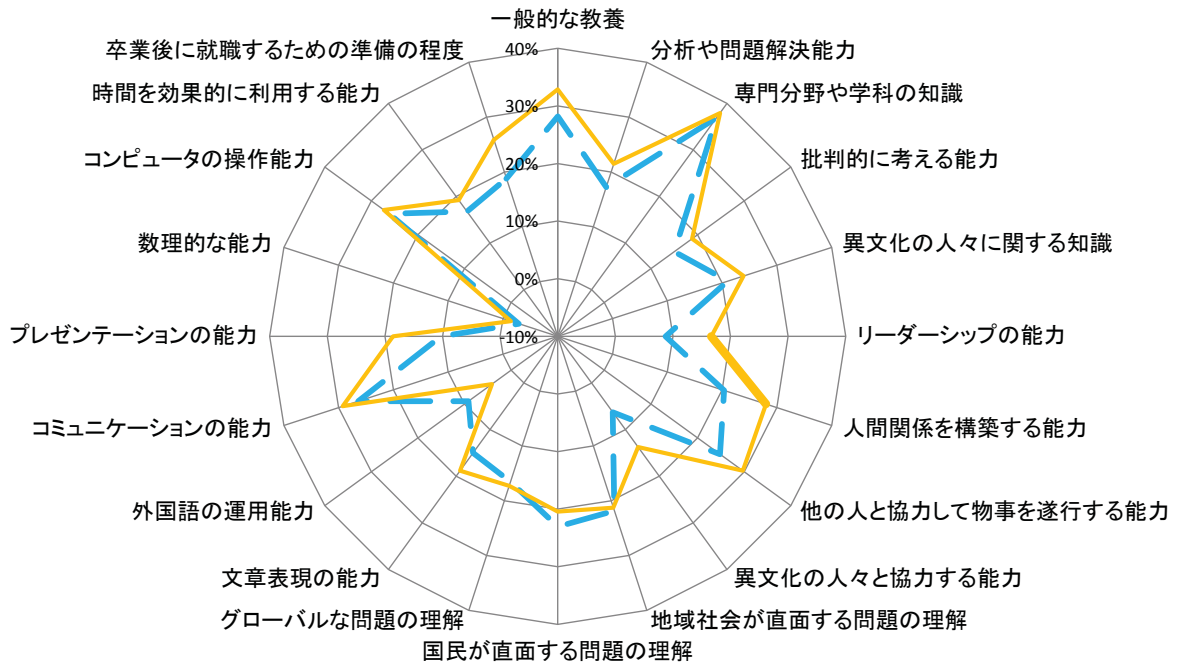
U短大の同一集団の経年変化(伸び率の差)①

●●● 2010年時1年生 — 2011年時2年生



U短大の同一集団の経年変化(伸び率の差)②

— 2011年時1年生 — 2012年時2年生



4. アクティブ・ラーニングと ラーニングコモンズ

アクティブ・ラーニングがなぜ注目されるのか？

- パラダイムシフトの転換

「教員中心 (teacher-centered)」から

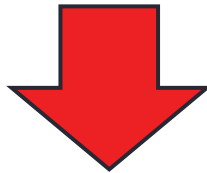
「学習者中心 (learner-centered)」へ

- ポスト近代社会においては、知識伝達型から新たなティーチングとラーニングの形態へ移行
- 基礎学力、標準性、知識量、順応性等の能力は従来からの知識伝達型のティーチングとラーニングでも可能
- しかし、多様性、創造性、チャレンジ性、個別性、能動性、リーダーシップ性などは知識伝達型、暗記型では達成することには限界
- 実践知、応用知の獲得にはアクティブ・ラーニングとの親和性

同志社大学におけるラーニング・コモンズ
: 授業外でのアクティブ・ラーニングの支援

目的をどこにおくか

- ・正課の授業外学習の担保と質向上
- ・アクティブ・ラーニングを通じて
学びの身体技法を覚える共有空間



- ・学生が「学び方を学ぶ」ことを体得する場として
位置づける**(PBL教育, 初年次教育の蓄積)**

※「考える」という「見えなかった行為」を可視化することに重点をおく：思考過程の共有化

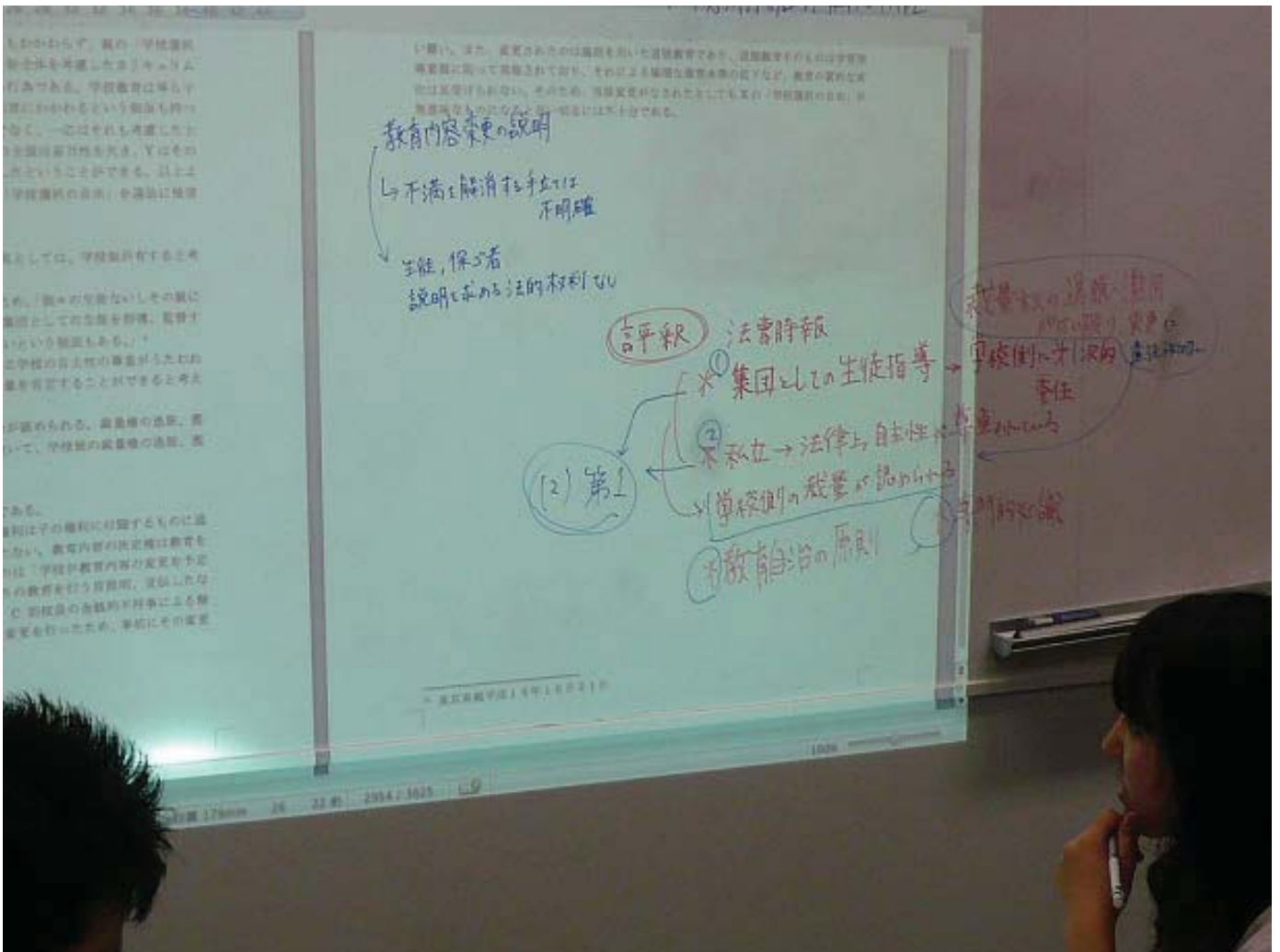


同志社中学校移転後の用地に、教室、研究室、学生の自習室や福利厚生施設、人文・社会系学生を対象にしたラーニング・コモンズ等を備えた新校舎「良心館」（地下2階、地上5階、建築面積約8,000㎡、延床面積約40,000㎡）を建設した。

コンセプト

- 面積 2,550㎡(日本最大級)
- 図書館とは別校舎:教室棟(40,000㎡)
- 「**知的欲望開発空間**」が全体コンセプト
- 目標は主体的な学びの進展,授業外学習の「質」の転換
- 2フロアで構成(各フロアコンセプトの共鳴)
 - 2F:クリエイティブ・コモンズ:学びの交流・啓発空間
「学びのコミュニティ」の創出
 - 3F:リサーチ・コモンズ:アカデミックスキル育成空間
チュータリング機能(学内初の学習支援組織)
- 運営主体は学習支援・教育開発センター
関係部署間の連携軸(図書館,学生支援センター,キャリアセンター,国際センターほか)







アカデミックサポートエリアのスタッフ



アカデミック・インストラクター
(教員3名)



ラーニング・アシスタント
(大学院生14名) ※常時2名配置

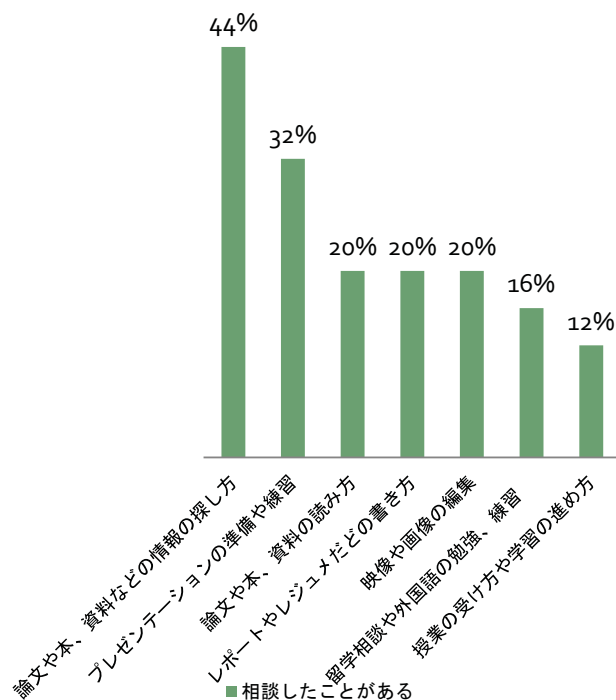


情報探索アシスタント
(図書館から1名)

**チーム
ティーチング**

インストラクター等への相談内容

2013年10月社会学部授業で実施したラーニングコモンズ利用状況調査

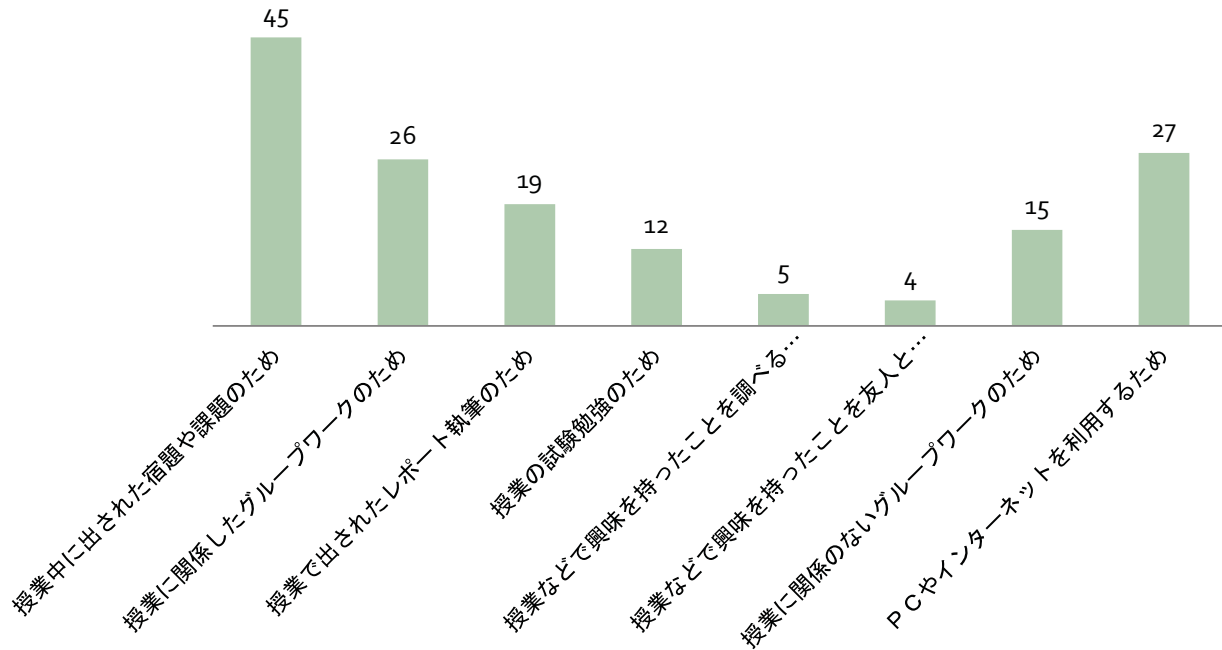


- 学年が上がるごとに質問は多様化・高度化

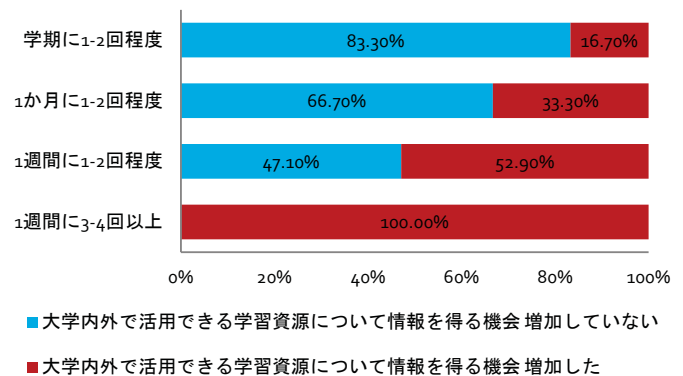
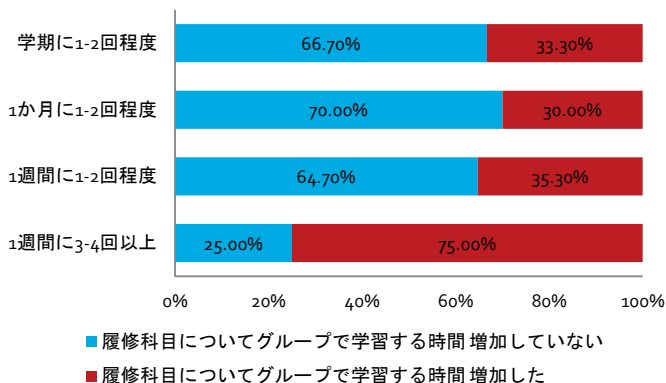
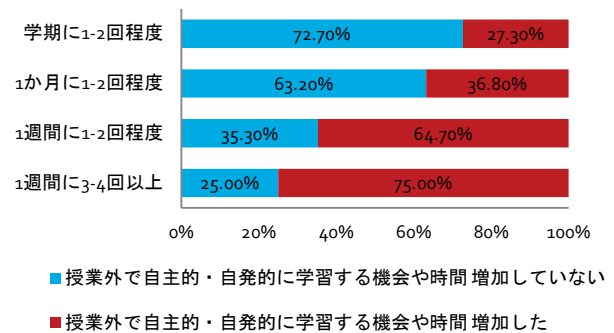
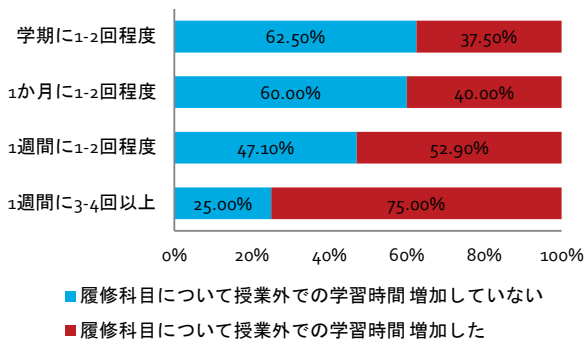
- 様々な質問に対応可能なスタッフの必要性
- 専門分野を持つ院生や教員の配置が有効

ラーニング・コモンズの効果の検証

社会学部での調査結果



ラーニングコモンズ利用頻度と利用後の主体的な学びの変化

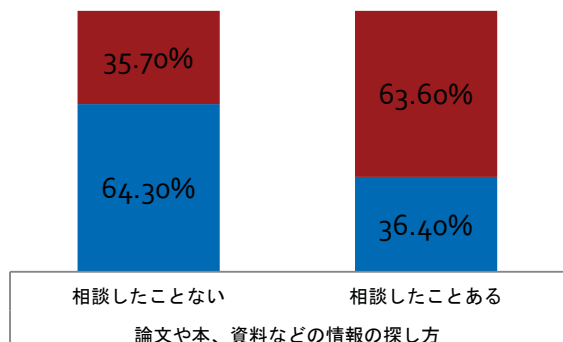


全般的に利用頻度が高いほど、主体的な学びへのエンゲージメントは増加

相談と利用後の学びの変化

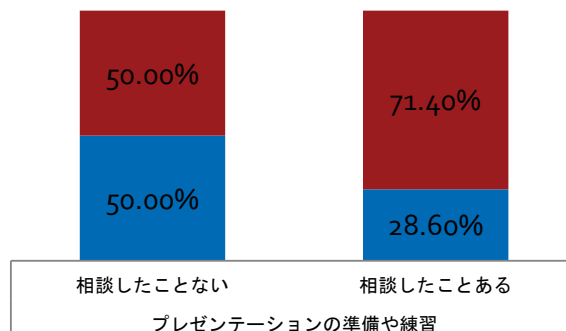
授業外での学修時間

■ 増加していない ■ 増加した



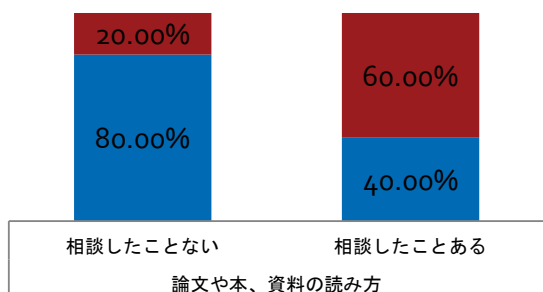
自主的・自発的に学習する機会や時間

■ 増加していない ■ 増加した



授業内容についての理解

■ 増加していない ■ 増加した



- ・インストラクターへの相談を通じて主体的な学びへの関わりが増加
 - ・情報の収集と利用の方法への知識・実践は最も飛躍的に増加
 - ・グループ同士での話し合いの機会は増加
 - ・ただし、一定のルール・制限は必要
- コモンズでのマナー等・学生同士が学びの場での暗黙ルールを内面化することが不可欠

47

授業とLC利用の組み合わせ、学生の変化

この授業の内容理解

■ 進まなかった ■ 進んだ



この授業のレポート執筆

■ 進まなかった ■ 進んだ



この授業の宿題の遂行

■ 進まなかった ■ 進んだ



この授業からの関心の広がり

■ 進まなかった ■ 進んだ



- ・教員が意識的にLCを利用させるように仕向けている授業では、授業との関連づけがアップ
- ・授業外学習の効果として機能する

48

まとめ

- ラーニング・コモンズは授業外学習を通じての主体的な学びへのエンゲージメントを促進する
- 教員が学生にLC利用をさせるような授業工夫あるいは働きかけが効果的
- 継続的な学生の自立的学習とエンゲージメントにおけるLCの効果の検証

新短大生調査(仮称)のお知らせ

☆2014年度から調査票を改訂

⇒ 調査票の見直し

☆ 改訂のポイント

◆ 調査コンセプトの変更(リサーチから問題解決へ)

⇒ 授業での活動や学習(学修)成果、満足度といった、短大生が短大から受けたインパクトの把握に特化

◆ 設問内容の精査＝調査項目の減少や表現の見直し

⇒ 学生や実施者の負担軽減、データの信頼性の確保

お問い合わせは一般財団法人 短期大学基準協会へ